中学校美術科における教材研究

川口政宏[1] 福田隆真[1] 小田篤志[2] 三浦知佳子[3] 堀井朋子[4] 井原隆行[5] 岩館こずえ[6]

A Study on the Leaning Materials of Art and Design in Junior High School

KAWAGUCHI Masahiro[1] FUKUDA Takamasa[1] ODA Atsushi[2] MIURA Chikako[3]
HORII Tomoko[4] IHARA Takayuki[5] IWADATE Kozue[6]

はじめに

美術科教育の研究は学校教育、特に小・中学校の教科を対象として、実践的側面とそれを裏付ける理論的側面の両方によって行われている。教材研究は実践と理論を結び付けるための重要な研究方法のひとつである。それらは授業内容で取り上げる個々の題材に関わる事象だけを研究対象にするのではなく、題材の教科全体としての位置づけ、題材から予想される発展性、ひいては美術科教育の全体像を見通して行われることが望ましいと考えられる。

本稿ではこれまで行ってきた美術科教育の教材研究の報告書[1]に関連して、特に中学校の美術科教育の実践的側面を取り上げて、絵画、構成、工芸の表現領域の中から、静物画、人物画、平面構成、木工芸の具体的な教材の意義と現実的な美術科の教育的状況を報告するものである。

1　静物画

（1）題材設定

中学校1学年では漠然と描くことの多かった絵も、2学年になると、より上手に、また、正確に描こうとする意識が強くなってくる。そのための方法としては、デッサン力、色の使い方、構図のとり方などいろいろな要素が考えられる。これらの基礎を造っていく上で、静物画は適切な題材であると思われる。なぜなら、この題材は、正確なデッサン、色彩による立体感の表現、材質感の表現、そして画面の構成等、絵画的要素を多く含んでいる分野と言えるからである。

---

(1)山口大学教育学部　(2)北海道白老町立萩野中学校　(3)秋田市立東小学校
(4)函館市立旭中学校　(5)堺市立福泉町中学校　(6)北海道森町立森中学校

（2）指導内容

①構図

構図の指導ではモチーフをどのように画面に取り入れるか、また、どのようにモチーフを並べるかがポイントになってくる。授業では6人ひとグループでモチーフを用意させた。

a．モチーフを動かしてみる。

b．自分自身が動いてみる。

aについては、事前の一斉指導のせいか、グループ内であれこれと並べている。が、当然6人全員満足するようになり得ない。そこで、bがポイントになってくる。ところが、生徒はこれを忘れがちになってしまうので、再三、指導する必要がある。一応、モチーフの配置、自分の位置が決まったところで、今度は画面への取り入れ方を考えさせる。ここでよく見られたのは、バックが異常に広くなってしまうことである。この点はスケッチの段階で修正させることができる。しかし、次の点はうっかり見落とすと、そのまま絵の完成までいってしまうことがある。それはモチーフの載っているテーブルまで意識して描こうとしない点である。テーブル上のものはよく見て正確に表現するのだが、テーブルまでしっかり描かない者が多数みられた。例えば、モチーフの間からみえる線がつながっていない、テーブルの形が極端にゆがんでいるものである。この点は十分に注意する必要がある。

②下描き

モチーフの配置が決まったら、ラフスケッチを行い、下描きに入る。下描きは、出来るだけ正確、精密に描かせるようにした。当然、陰影も十分に描き込ませる。生徒は形はよく描ける。しかし、なかには直線が上手に引けず、定規を用いる者もいた。また、陰影もよく描ける。しかし、ラフスケッチの時にみられたように、テーブルが忘れがちになる。テーブルに落ちた影、これが存在感を表現する上で重要になってくる。この点を忘れたら静物画ではなくなってしまうので、この点を特に注意する必要があるだろう。また、下描きは、もうこれで絵が完成した、というくらい鉛筆で描かせた。これにより、彩色する前に光と影の関係がより一層明確化されるものと思われる。

③彩色

彩色の方法については、様々な方法がある。生徒の彩色方法をみると、いくつかのパターンに分けることができる。

a・・・モチーフばかり塗り、最後にバックとテーブルを処理する。

b・・・モチーフ、バック等、同一進度で処理し、仕上げていく。

c・・・部分的に仕上げていく。

d・・・暗い部分はよくできているが、明るい部分がない。

などの例が挙げられるが、その中で共通していえることは、「バックの処理」と「明るい部分の処理」であった。そこで、この2点に特に注意し、作業を進めさせた。

「バックの処理」については、一番多かったのは1色のみで簡単に塗ってしまい、全体の雰囲気をこわしてしまうことであった。そこで、まず最初にモチーフ、バック、テーブルの大きな3つの部分を同一進度で進めること、特に、バックは単色ではなく、複数の色を用いることにして作業に取り組ませた。また、光の方向に注意させ、バックにも明暗をつけるようにさせた。更に、色はモチーフを

十分引き立たせるものとした。このことにより、色の変化、厚みが増し、また、モチーフとのバランスもかなり良くなった。そして、太めの筆を使わせること。生徒は細めの筆を好んで使う傾向があるため、絵のタッチが弱くなってしまうからである。

次に「明るい部分の処理」についてであるが、生徒は中間的な部分、明るい部分が上手に表現できない。それに対して、暗い部分は都合よく描くことが出来る。これらについては、作品例、模型などを用いて説明・実験をさせたが、十分に理解させることが出来なかった。そこで、少し変わった実験をしてみた。それは昼と夜と夕方の違いである。明るい部分は「昼」、暗い部分は「夜」、そうしてその中間には必ず薄暗い部分の「夕方」があるということである。この説明で、大部分の生徒がその違いに気付くことが出来た。

（3）完成作品

図1：デッサンはよくできているが、テーブル上の影が弱くなっている。

図2：細かく描かれているが、少し表現がかたくなってしまっている。

図3：全体的にまとまった仕上がりになっている。

図4：光の方向があいまいになっている。

図5：明るい部分の段階が不足気味になっている。

図6：多少荒っぽくなっているが、力強く描かれている。

（4）まとめ

この課題でポイントにしたのは、まず、構図の決め方である。これは、モチーフをどこまでの範囲で、どのように画面に入れるかが問題となる。次に、デッサンでは、いい加減になりがちな下描きをどこまで正確に描かせるか、多少時間はかかったが、作業後、生徒の絵に取り組む姿勢にも変化が見られた。

「静物画」を通して生徒が学び取れる点はたくさんある。しかし、すべてを得ようとすると、結局、消化不良を起こしてしまう。あたりまえのことだが、ポイントを絞る必要がある。しかもそのポイントは以後の作品に内容的に関連するものでなくてはならない。

（小田篤志）

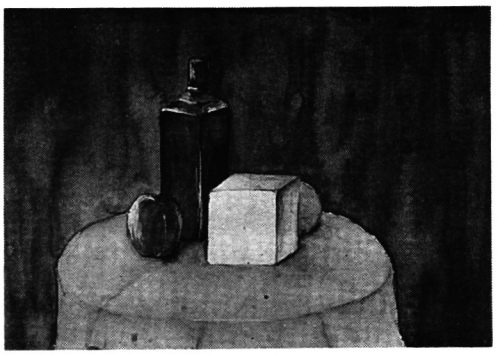


図1　静物画

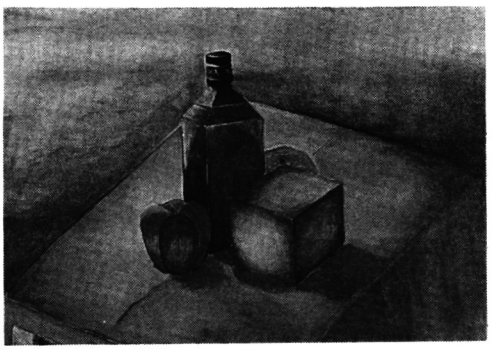


図2　静物画

図3　静物画

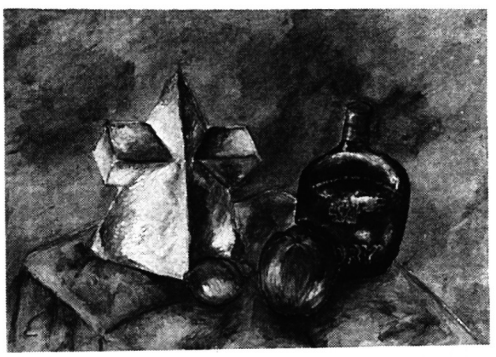


図4　静物画

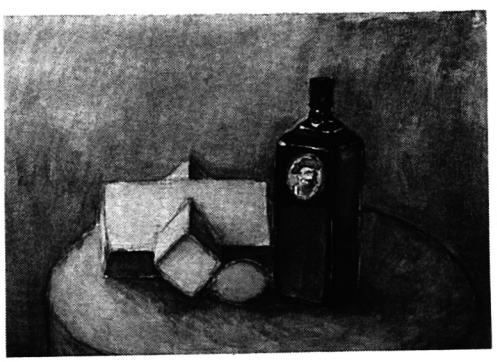


図5　静物画

図6　静物画

2　人物画「ものの動きをとらえる」

（1）題材設定

絵画表現の中でも、観察表現は小学校高学年から個人差が顕著に現われてくる分野であると考えられる。自分の思うように表現できないということが、観察表現から子ども達を遠ざけている。また、観察画のなかでも静物画と比較した場合、人物画は見えた形と表現された形の比較が感覚的ではあるものの容易にできるため、敬遠されがちである。客観的思考が深まる時期であることを考えたならば当然のなりゆきと考えられる。

観察による表現は単に外界の対象を画面に移し変えることではない。対象物の取捨選択などの工夫、あるいはどのように対象物を見るかなどの見方、見え方は、学習を通して子供達に経験させ習得させなければならない。

（2）指導内容と留意点

①目標

・人物の基本的構造を理解し、部分と全体の関係を見ながらプロポーションや動きを表現する。

・色の性質を理解し、立体的な彩色をすることが出来る。

・身近な人物から魅力ある表情や動作を見つけ工夫しながら表現することが出来る。

②展開

＜1＞　人物の基本形の理解

a．横顔を比例関係に注意しながら模写する。

目、鼻などの各部と全体の形とのつながりを理解させるため、紙の上で定規を使って確認させる。立体感のある鉛筆デッサンの練習も同時に行った。

b．動きに伴う骨格の変化

O．H．P．を使い、座る、立ち上がるなどの動作の場合、人体の骨格がどのように変わるかを理解させる。

c．鉛筆デッサン

a，bの各段階の学習を踏まえながら二人一組でデッサンする。表情を出すために、手や首などの動きを工夫したポーズにすることを指示する。

＜2＞　色の性質の理解と彩色

a．色の性質の理解

画面が単一な固有色になることを避けるため、色の三属性を理解させる。また、立体感のある彩色を心掛けさせるため、色の性質としての軽重、進出、後退も同時に指導する。

b．彩色

彩色の手順としては、まず始めにおおまかな形をとらえながら、中間色で彩色する。同時に、モデルを見ながら明度を三段階まで確認させる。

＜3＞自己評価

自己評価表（図７）を用い、学習過程を振り返らせるとともに各自の到達度を確認させる。

（３）完成作品

図８：色の性質を理解するとともに、明るさの違いを大まかに見つけ、表わそうとしている作品である。手の大きさ、肩などから分かるように、デッサンの段階では平面的な作品であった。彩色の段階で伸びた作品である。

図９：顔の向きをよく観察しながら、動きを捉えようとしていることがよく分かる作品である。服のしわや手などからわかるように彩色によって形がなくなることを意識し過ぎ、塗り絵のようなままで終わっている。

図１０：図８、９に比べ、丁寧なデッサンをしている作品である。しかし、目や鼻を最後まで描くことが出来なかった。服の彩色が示すように、概念として明るさを捉える傾向が強く、固く萎縮したような印象を受ける。

図１１：色の性質を理解しながら、のびのびと彩色している作品である。服のしわなど、細かい部分の処理につまずきを感じるが、筆のタッチを活かしながら重色したことで存在感が感じられる。

図１２、１３：両者ともに、対象を良く観察しながら作業が進められたことがよく分かる作品であるが、次の二つの点において違いが見られる。一つは、空間の処理の仕方である。背景については、特別の指示は与えなかったが、図１３に比べ、図１２は右の部分に物足りなさを感じる。鉛筆デッサン後の画面構成の指導の必要性を感じる。二つ目はサインペンの使用である。図１３は筆のみで素材感を表現しようとしているが、絵の具の濃さもあり、全体的にぼんやりした印象をうける。それに対し図１２は髪の毛、スカートのひだなど主な部分をサインペンで描いたため、画面が引き締まり、安定感を感じる。

（４）考察

作品の評価から上位１５名、下位１５名の集計結果（図１４）より、この題材についての考察を進めたい。

上位グループと下位グループの両者において、ともにマイナスの値になっているのは⑤の項目である。モデルを見るとき、細部に目をとらわれ、全体の関係を捉えられないことが数値からはっきり読み取れる。項目⑧の色の濃淡の工夫については、両者ともプラスの値を示しているが、項目⑦の明暗の項目では両者に大きなずれが生じている。立体感のある表現に対する関心の強さを示すとともに、習得の難しさが分かる。

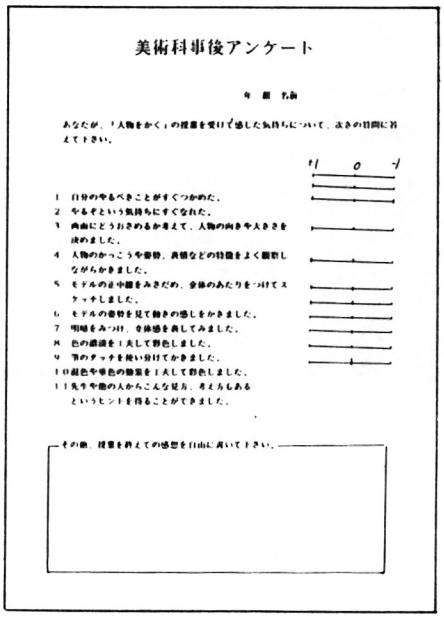
項目②の差が大きくなっていることも大きな特徴としてあげることが出来る。題材設定の際述べた意欲の差がはっきり現われている形の把握力に関する項目では、両グループともマイナスの値であるが、上位と下位の値が逆転しているのがわかる。不得意な部分を克服しようという意欲的な取組と見ることは出来ないだろうか。

デッサンにはいる前に顔のプロポーションの理解のため、模写を扱ってみたが、単調になりがちだったのは、この題材を行った時期が、一学年の一学期であったためだと思う。しかし、見方の指導とし

ては新しい発見をすることが出来たと考えられる。

大人の表現様式を与えることにより、子どもの創造性を押し潰してしまうのではないかという懸念が、当然考えられる。しかし、子どもなりの工夫を認め自信を持たせると同時に、学習内容を系統的に捉え、発展的に構成していくような、きめ細かい教材研究の必要を感じた。

（三浦知佳子）



美術科事後アンケート

年　組　名前

あなたが、「人物をかく」の授業を受けて感じた気持ちについて、次の質問に答えて下さい。

	+1	0	-1
1 自分のやるべきことがすぐつかめた。			
2 やるぞという気持ちにすぐなれた。			
3 画面にどうおさめるか考えて、人物の向きや大きさを決めました。			
4 人物のかっこうや姿勢、表情などの特徴をよく観察しながらかきました。			
5 モデルの正中線をみきだめ、全体のあたりをつけてスケッチしました。			
6 モデルの姿勢を見て動きの感じをかきました。			
7 明暗をみつけ、立体感を表してみました。			
8 色の濃淡を工夫して彩色しました。			
9 筆のタッチを使い分けてかきました。			
10 赤色や橙色の絵具を工夫して彩色しました。			
11 先生や他の人からこんな見方、考えかもあるというヒントを得ることができました。			

その他、授業を終えての感想を自由に書いて下さい。

図７　美術科事後アンケート

図８　人物画
「ものの動きをとらえる」

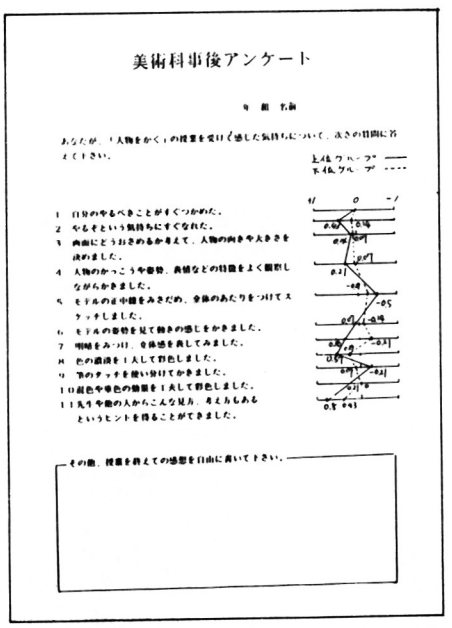
図９　人物画
「ものの動きをとらえる」

図10　人物画
「ものの動きをとらえる」

図11　人物画
「ものの動きをとらえる」

図12　人物画
「ものの動きをとらえる」

図13　人物画
「ものの動きをとらえる」



美術科事後アンケート

年　組　名前

あなたが、「人物をかく」の授業を受けて感じた気持ちについて、次ページの質問に答えてください。

上段グループ ——
下段グループ ----

1　自分のやるべきことがすぐつかめた。
2　やる気という気持ちにすぐなれた。
3　画面にどう位置するかを考えて、人物の向きや大きさを決めました。
4　人物のかっこうや姿勢、表情などの特徴をよく観察しながらかきました。
5　モデルの正中線をみさだめ、全体のあたりをつけてスケッチしました。
6　モデルの姿勢を見て動きの感じをかきました。
7　明暗をみつけ、立体感を表してみました。
8　色の濃淡を工夫して彩色しました。
9　筆のタッチを使い分けてかきました。
10　顔色や肌色の微妙を工夫して彩色しました。
11　先生や他の人からこんな見方、考え方もあるというヒントを得ることができました。

その他、授業を終えての感想を自由に書いてください。

図14
美術科事後アンケート

3　人物画「絵を描く友達」

（1）題材設定

人物画の教材は、友達同士でモデルをして協力しながら作品に取り組むことの精神的な意味を考えることが出来る。また、形の見方、とらえ方、彩色の仕方を教えることにより、生徒に確かな表現力を身に付けさせ、創造する喜びを味わわせることの意味も考えることが出来る。

人物画の制作中に新しい発見をして創造している生徒や完成した作品に対して満足感を持つ生徒は多いとはいえない。絵画は苦手であるという意識を持ったまま、長時間にわたる制作を強いられているような態度で取り組む生徒もいる。指導者が目指す目標を達成させるにも個人差が大きく現われる。

現代、私達をとりまく生活環境はボタン一つの操作で物事が処理される。そのような中で、生徒達に欠けている、考える、手を使う、工夫する、困難にぶつかる、失敗する、修正する、ということは、絵画の制作を通して体験させることができるのではないだろうか。画一的な結果による満足ばかりでなく、絵画の制作によりひとりひとりが苦労して観察したものを表現できた喜びを味わわせたいものである。完成した作品に個人差が現われることを、絵画の教材の特性として、ひとりひとりが新しい発見をするような指導を追求していきたい。

（2）目標

①人間の比例や動勢・空間の中に存在する感じを捉えて表現することが出来る。
②色に対して興味・関心を持ち、立体感を出した彩色をすることが出来る。
③人物画への関心を高め、意欲をもって表現することが出来る。

（3）指導内容と留意点

①主題の把握

「絵を描くともだち」をテーマにして人物を描くことにより、モデルの形、動き、色を捉えて表情や印象を表現し、絵の中に生命を感じさせることを目指すことを理解させる。複製画（「真珠の女」コロー、「モナリザ」レオナルド・ダ・ビンチ「毛皮を付けた自画像」デューラー、「麗子像」岸田劉生、「読書」黒田清輝）を動きのあるものとないものを比較して鑑賞させながら、人物の大きさと空間のバランスや、視線の方向をやや広くあけることなどを視覚的に捉えさせ、構図について説明する。

互いに絵を描いているところを描くのだが、人物の動きや空間の中に存在している感じを出すために、モデルを真正面から描くことを避けるように指示をする。机を思い思いの方向に移動させ、隣の席の友達でなくても動きが一番美しくみえる友達をモデルにするように促す。

②鉛筆デッサンの方法、手順の理解

顔や衣服にこだわり、動きや骨組みを捉えられなかったり、消しゴムばかり使い時間がかかる生徒が多い。従って、まず、鉛筆を軽く持ち、大きさ、方向、骨組みを考えながら、大まかな線で書き、次に肉づけをしていくように形を確かめながら描き、そして、鉛筆をしっかり持って、細部を描くことを教えていく。

③鉛筆デッサン

人物のからだの比例を捉えやすくするために、黒板に実物大の頭部、首、胴部、腕、手の形に切り取った紙を貼り、大きさ、長さ、太さを比較させる。手を小さく描く傾向があるので、掌を顔に付けさせて大きさを比べて描かせる。肩や肘を針金を曲げるように描く生徒には、肩や肘を動かせて関節を意識させて修正させる。視覚で捉えた形と、画用紙に描かれている形の狂いは、言葉だけの説明でなく、身体に触れてやり、生徒自身の体を動かせてその部分の構造を感じさせながら直させる。背景は見えたものをすべて描くのではなく、省略したり、強調したりして、人物を引き立たせるようにする。

④彩色

彩色にはいるとき、白に少量の赤と青を混色して中太の筆で大まかになぞることを指示した。これは、鉛筆の線の中を塗り絵のようにはみ出さないように気をつけながら、かた苦しく塗り込むことを失くすために、なぞった色が微かに残ることにより、陰の感じを出させるためである。

さらに、明るい色から暗い色へと順に着色させることを指示した。混色により、色の明度、彩度が変わることを体験させ、それらを重色していくことによって、立体感を出していくことを促した。肌の色、絵の具の“はだいろ”は使わずに、個々が感覚的に選んだ色を混色してつくらせ、手に色を置いて確かめさせた。顔では鼻や額の高いところは明度を高く、ほおは赤みを帯びて、鼻の横側やあごの部分は明度を低くして立体感を出すことを教える。生きている感じを失わせないように、髪やまゆげ、瞳は真黒ではなく、白目は真白ではないことに気付かせる。血の通った肌、布でできている服やカーテン、堅い壁、窓のそれぞれの質感を出すために筆のタッチを区別させる。

⑤鑑賞

自分の作品を見て、成功したところ、失敗したところを省みさせる。また、全員の作品を貼りだして、良さを認め合わせながら鑑賞させる。

（4）まとめ

完成作品より考察すると、人物の形の描き方としては、画面に身体を切らないようにしていれることができた作品は少ない。そこで、鉛筆デッサンでの構図の取り方の指導を改善していかなくてはならない。身体の比例や動きを捉えることができた生徒は比較的少ない。彩色による質感や立体感の表し方は、線の方向によるもの（図１５、１６）、絵の具の水の量によるもの（図１７）、色の明度、彩度によるもの（図１８、１９）、色の明度、彩度と線の方向を組み合わせたもの（図２０）と様々である。同じ指示をしても、生徒は自分の頭で解釈して選択して表現していく。一人一人の要求に応じた多くの表現の方法を研究して示さなければならないと考えられる。表現の基礎的技術をあらゆる手段を駆使して具体的に教えることが、美術科教育の目的を達成させていくカギとなるのである。

（堀井朋子）

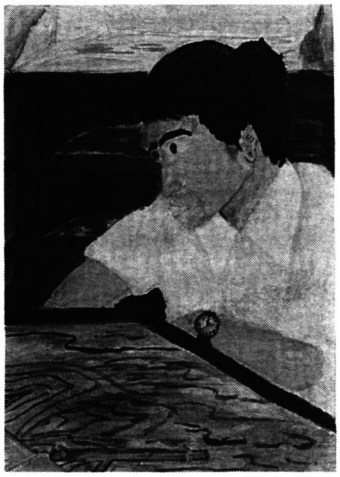


図15　人物画「絵を描く友達」

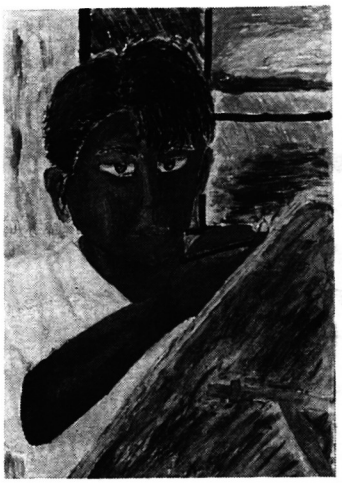


図16　人物画「絵を描く友達」

図17　人物画「絵を描く友達」

図18　人物画「絵を描く友達」

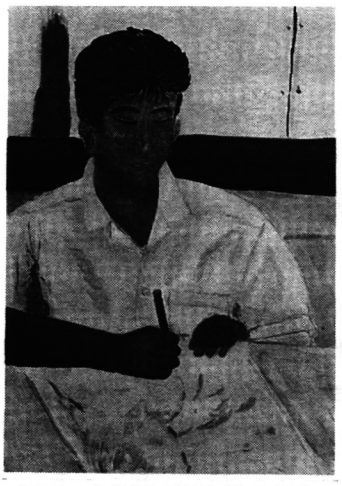


図19　人物画「絵を描く友達」

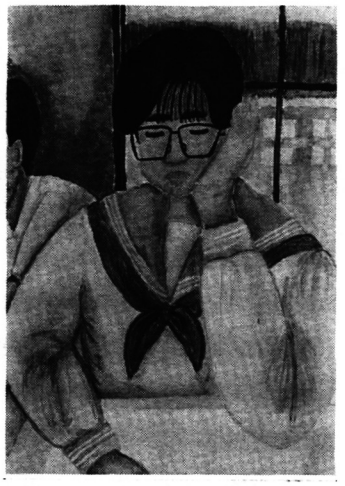


図20　人物画「絵を描く友達」

4　自然物・人工物の構成と色彩

（1）題材設定

自然物や人工物をよく注意して観察すると、長い期間に渡って磨かれた「自然の造形美」や人工物の「機能美」など、これまで気付かなかった形や色の美しさを発見することができる。自然物や人工物の形や色をもとに、新しい形を構成することは、対象をよく観察し、また、観察の仕方を工夫するなど、造形における基礎的能力を育成することができる。

また、中学校の美術科における色彩の学習を進めていくうえで、色彩に対する基礎的理解や類似・対照などの色彩感覚を育てることもこの題材の目標とした。

（2）目標

①自然物や人工物を観察し、その形や色をもとに新しい形を構成させる。

②色彩の一連の学習を通して、色の類似や対照の調和を考えて配色を工夫させる。

（3）指導内容

色彩の学習

①無彩色と有彩色

色コマ（１２色）を無彩色と有彩色に分類する。

②色の三属性

色相・・・色コマを色相順に並べ、１２色相環をつくる。

明度・・・無彩色において５段階の明度表をつくる。

彩度・・・色コマを彩度の高い鮮やかな色と低い鈍い色に分類する。

③配色と感情

暖色と寒色・・・色コマを組み合わせて、暖かい感じのする色、冷たい感じのする色を表現する。

重く感じる色、軽く感じる色・・・色コマを明度によって組み合わせ、重く感じる色、軽く感じる色を表現する。

類似色、対照色・・・色コマを組み合わせて目立つ配色、目立たない配色を表現する。

④純色、清色、濁色

水彩絵の具を混色することにより、色相の変化のグラデーションと明度の変化のグラデーションを表現する。

構成の学習

①対象の決定

身近にある何気ないものの中から興味ある対象を見つけだす。

②形の観察

鉛筆でスケッチしながら形の特徴を見つけだす。さらに、見る角度を変えたり（横から、下から、

前から、後ろから)、見る方法を変えたり(全体を見る、部分を拡大してみる、切断してみる、分解して見る、透かしてみる）などを考えて、新しい形の追求をさせる。

③構成

鉛筆スケッチを整理して、コンパス、定規、方眼紙なども使用し、単純化や強調を行って、直線で表す、曲線で表す、幾何的に表す、明暗やシルエットで表す、伸縮する、動きを持たせる、複合させるなどの構成をし、それらを単独で用いるか、画面構成を考えて複数で用いるかを検討させる。

④制作

構成したものを下描きし、配色の効果を生かし、色紙（トーナル・カラー）を利用して計画を立て、着色する。

（4）まとめ

この題材は自然物や人工物をもとに、その特徴を捉えて単純化や強調を行い、さらに画面構成を行うという「美的感覚」や「創造力」の育成と色彩理論を学習した後に、着色の順序、混色の方法、絵の具の濃さや量、着色の仕方、用具の使い方など、平面構成の基礎技術を習得するという2つの側面を持っている。

色彩理論や基礎技術はトーナル・カラーを用いた色コマによって色彩の基礎的な理論を学習した後に、混色の方法や着色の仕方などを、実際のグラデーションなどの小さい作品を制作することにより、水彩絵の具を用いた基礎技術を習得することができたが、どの程度残すかという感覚的な訓練が少なかったように思われる。作品によっては、色彩の変化に重点を置きすぎて、形態の変化が乏しい傾向も見られた。

（井原隆行）

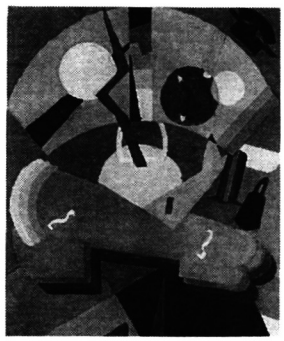


図21

「上皿天びんによる構成」

図22

「しいたけによる構成」

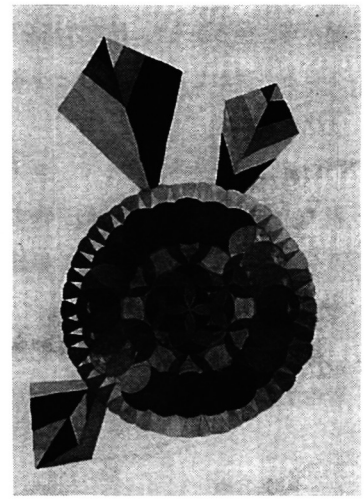


図23

「あじさいの花による構成」

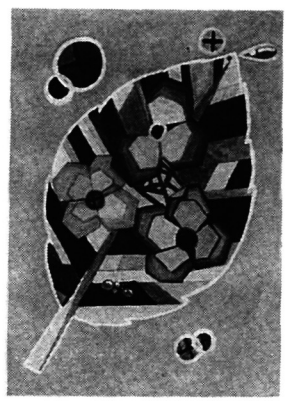


図24　「花と葉による構成」

5　木工芸「寄せ木細工」

（1）題材設定

現代っ子の無器用さがしばしば指摘されるが、ものを作ることへの興味は、遊びの中での機会が少ない分だけ、より強く潜在していると思われる。表面的には「美術なんて」と装っていても、美術の授業で次は何をやらせてくれるのか、ということについて、生徒は意外と興味を持っているものである。

種類も色も長さも異なる木片を自由に接着し、美しく磨き上げるのが寄せ木細工である。これを題材に取りあげたのは、比較的木工芸に慣れている生徒にとって、割合、新鮮に取り組めるのではないかと考えたからである。与えられた木を積み木やパズルのように組み合わせていく自由さや、磨けば磨くほど、滑らかに美しく仕上がるなど、生徒にとっては十分面白く、手ごたえのある題材である。特に、使えるものを作るということが、意欲を持たせるもとになっていると思われる。

また、木彫のように道具の善し悪しに強く影響されることもないし、電動糸ノコが思うように使えないような環境にあっても差しつかえないほど、準備の点でも簡単である。

（2）指導上の留意点

①材料

「寄木アート」などの名で市販されているものを使用している。メーカーによってセットの内容が異なるが、木の種類は「桂」「しな」「えんじゅ」「ラワン」などから２、３種類、木の寸法は、それぞれ１～１０cmの範囲で３種類から多いもので５種類程度の組み内容となっている。太さは１cm角。少人数であれば、板を購入して教師の手作りで準備することも可能だが、寸法の狂いがあると、組み合わせるときに大変である。

②用具・その他の材料について

木の接着には木工用ボンドを用いる。よりしっかり圧着するために、クランプやたがねを用いると便利である。紙ヤスリは#１２０、#２８０のものを各自用意させた。ＮＴドレッサーという金属製のヤスリがあると作業の能率が上がる。作品によっては鋸なども必要である。また、蝶番などの金属類や鏡なども自由に用意させた。そのほか、隙間を埋めたりする細かい作業のために、細かいヘラがあると便利である。割箸の先を削って用意させておくとよい。

③仕上げについて

水性ニスかクラフトワックスで仕上げる。どちらかと言えば、ワックスの方が失敗がなく無難にできるが、艶のあるニス仕上も美しい。蓋付きの箱などに、蝶番を付ける場合は一番最後にする。

（3）指導内容

①導入～構想

作りたいもののイメージを考え、イメージが決まったら、大きさと木片の組み合わせを考えさせる。木の組み方については、模様を意識させる。ただし、寄せ木の場合、不規則な配列から生まれる美し

さもあるので、模様についてはあまり強調しない。

②接着

接着作業の指導でいちばん強調しなければならないのは、板を作る→磨く→全体を組み合わせる、という作業の流れである。寄せ木は磨き上げないと美しさは得られないので、板を作った段階で、よく磨くことが重要である。十分磨かないで立体にしてしまうと、内側を磨くことが困難になる。接着は下敷きなどの平らな作業台の上で行う。クランプやたがねで締め付けるときれいに接着できるが、輪ゴムでも代用できる。

③磨き

接着剤がすっかり乾いてから、紙ヤスリでよく磨く。紙ヤスリの掛け方は、木片など固くて平らなものを紙ヤスリにくるんで磨く。それぞれの板の内側が磨けたら、全体を組み合わせる。形が歪まないように十分注意する。よく乾いてから、仕上げの磨きにかかる。角を極端に丸くしたりするときは、鋸をつかってから滑らかにする。

④塗装

塗装にはいる前に、若干湿らせた布で、木の粉を完全にふき取る。クラフトワックスはそのまま布に取り、薄くのばしながら表面に丁寧に塗り込み、その後乾いた布で乾拭きすると、落ち着いたツヤが出る。クラフトワックスは薄くのばしてしまわないと白く固まるので、付け過ぎは禁物である。また、水性ニスの扱いについても指導する必要がある。

⑤まとめ

塗装が終われば一応完成であるが、デザインによっては蝶番などの部分を取付けて終りということになる。箱のフタ部分に蝶番を取付けるのならば、多少手間がかかるが、内側に付けるやり方を指導する。作品完成後は、反省と自己評価をさせる。

（4）結果とその考察

美術の題材は表現したり製作したりすることに喜びを感じ、熱中するような授業過程を設定することが望ましい。しかし、中学校3学年ともなると知的な発達や様々な情緒的要因により、すべての生徒の興味を引き起こすような題材を設定するのは困難である。この、寄せ木細工の題材は複雑な作業であるが段階的に習得することによって、徐々に表現や製作の興味を引き起こし、製作の成就感を養うことができる。そのために指導者は細かい個々の作業について指導や対処の方法を把握しておく必要がある。この題材を通して、生徒はものを作るための根気強さや、やり遂げる態度を養うことができると考えられる。

（岩館こずえ）

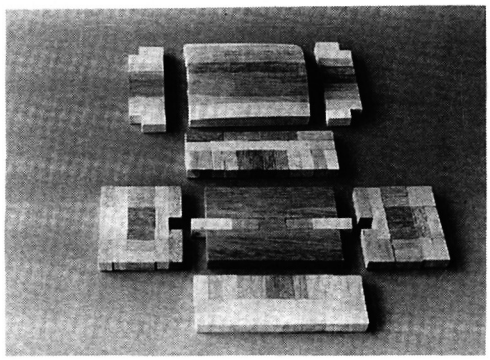


図25　「寄せ木細工」　組み立て前

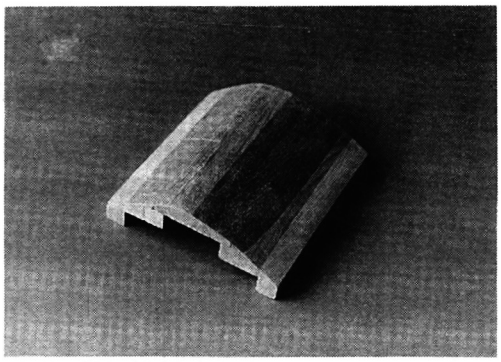


図26　「寄せ木細工」

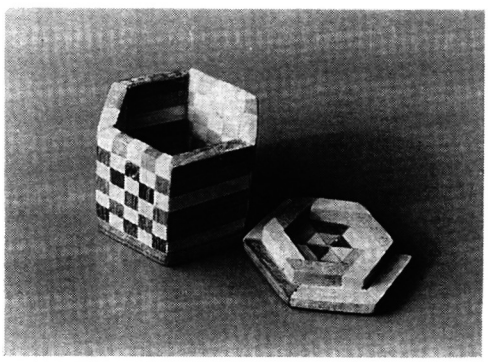


図27　「寄せ木細工」

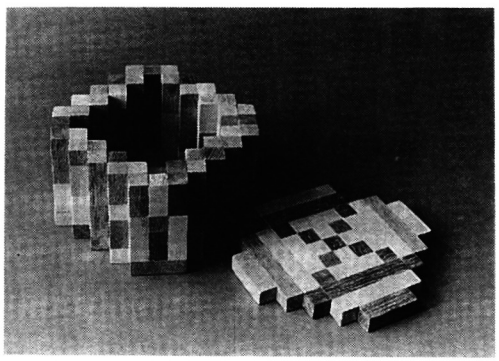


図28　「寄せ木細工」

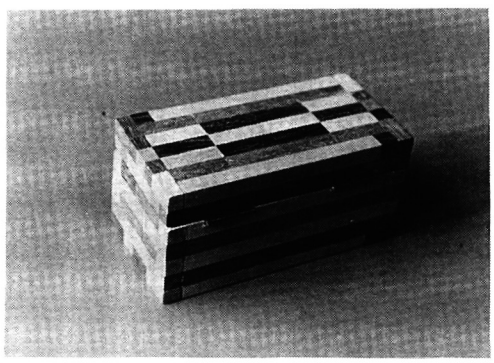


図29　「寄せ木細工」

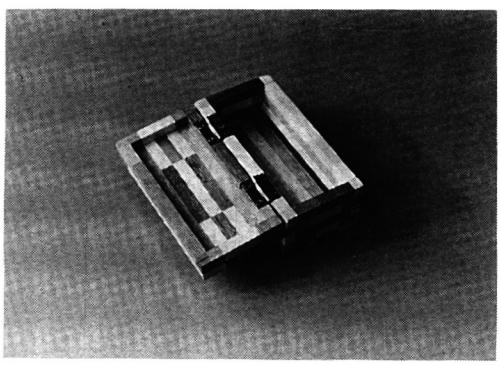


図30　「寄せ木細工」

注

1）福田隆真、藤井昭夫他　「美術科教育教材研究　その１」　人文論究第４７号北海道教育大学函館人文学会　１９８７年

福田隆真、岩館こずえ他　「美術科教育教材研究　その２」　人文論究第４８号北海道教育大学函館人文学会　１９８８年

福田隆真、原田信夫他　「中学校美術科におけるデザインの鑑賞に関する一考察」　山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要第１号　１９９０年

付記

本稿の作成に当たり、北海道鵡川町立鵡川中学校、秋田市立将軍野中学校、函館市立旭中学校、堺市立福泉南中学校、北海道森町立森中学校の生徒作品の協力を得た。ここに感謝致します。